

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第十回

13章 黒船襲来

かえい
嘉永六年（一八五三）

かえい
嘉永六年（一八五三）六月三日、日本に激震が走った。

せき
米国の黒船四隻が突如、浦賀沖に現れたのだ。

米国東インド艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリーの訪

問は、日本に通商を求める平和的なものだった。だが上海シヤンハイを

たペリーは浦賀に來航する前に琉球王国りゅうきゅうを表敬訪問し、また、小笠

原諸島わらを探索し、その領有を宣言するなど、戦略的な行動を取って

いる。

幸い幕府は、林子平しんぺいが「三国通覧図説」で小笠原諸島について記述していたことを根拠として、小笠原領有は拒否できた。

この時、ペリーは国書を手渡し、翌春の再来を予告して立ち去った。

このため、世は大騒ぎになった。

ペリー來航の十九日後、心労が祟たたったか、第十二代將軍・徳川家慶いえよし

が死去した。その死は最悪のタイミングだった。

実はこの頃、ロシア使節・プチャーチンも七月十八日、四隻の軍艦を率い長崎に来航していた。露寇事件以来、ロシア対策は半世紀近く講じてきたので、ロシアに対する幕府の対応は迅速かつ的確だった。

海防掛兼務の勘定奉行・川路聖謨かんじようぶぎようかわじとしあきらに加え、天文方で蘭書翻訳に携わっていた箕作阮甫たすきみつきりげんぼを同行させ、更に武田斐三郎たけだあやさぶろうを通詞として派遣した。彼らは同年十二月、長崎でロシアと本格的な外交交渉に入る。

嘉永六年の米国、ロシアという二大強国の動きの裏には、ある人物が深く関与していた。

実はその前年の嘉永五年（一八五二）、ロシア皇帝ニコライ一世に招かれ、日本への親書を起草したのは、あのシーボルトだったのである。それを嘉永六年七月、プチャーチンが長崎に持参したのである。

シーボルトが起草した条約の私案は、日本に開国を要求したペリ―提督にも影響を与えた。ペリ―は日本を訪問するにあたり一年間、シーボルトの私案を研究していたのだ。

シーボルトは、日本の政治の中心は江戸だが、外交の窓口は長崎だけなので、江戸に行っても長崎に回航かいこうされ改めて国書を提出させられた上で、江戸で審議しんぎし長崎に伝えるという経路しかないという、適切なアドバイスをしていた。

そこでロシア使節・プチャーチンは、シーボルトの助言に従い、まず長崎に寄港したわけだ。

だがペリーはシーボルトの示唆に従わなかった。そんなことをしても国書をたらい回しにされた挙げ句、確答を得られずに終わるのが、幕府の消極的外交の常套手法だ、と看破していたのだ。

そこでペリーは、いきなり江戸の喉元の浦賀沖に現われ、礼砲をぶっ放し、幕府を震え上がらせるとい手法を採ったのである。

その行動は効果的で、武威を根底にした幕府の権威は一気に揺らいだ。

通商条約の締結を迫るペリーの圧力は、江戸城に直接伝わった。長年、惰眠を貪ってきた幕府に、国難に対応する技量と度量を持つ者は少なかった。だがこの時、阿部伊勢守正弘が老中首座にあったことは、幕府にとって幸運だった。

有能な現実主義者の老中・阿部正弘は、直ちに諸々の手を打ち始める。

まず蘭学に対する締め付けを緩めた。外国との交渉には、蘭学者を登用するしかないのです、これは当然の一手だった。

六月、天文方教授の箕作阮甫と杉田成卿に、ペリーの国書の翻訳を命じると、阿部正弘は閣議を召集、議論を重ねた。

その上で七月一日、翻訳したペリーの国書を、御三家を始め諸大

名に提示し意見を求めるといふ、徳川幕府において前代未聞の措置をした。

それは老中首座・阿部正弘が悩み抜いた挙げ句の決断であった。

しかし、そうした処置は、ペリー来航を見て急ぎ上府した彦根藩の井伊直弼などの守旧派にはきわめて不評だった。

当初、鎖国の継続を主張した井伊直弼は、阿部正弘の広く公論を求めるといふ姿勢が、幕府の弱腰に見えることを危惧していたのだ。もつとも阿部正弘の方も、井伊直弼を評価していなかったので、お互い様である。

更に阿部正弘は守旧派の神経を逆撫でするかのようになり、嫌われ者の前水戸藩主・徳川斉昭に幕府参与を命じた。

その後、旗本にまで意見を求め、貧乏幕臣の勝麟太郎が積極海防論を具申し、頭角を現している。こうして、幕末の動乱の立役者たちが続々と、表舞台に登場してきた。

そんな中、幕府は、武蔵国岡部藩に幽閉していた高島秋帆を赦免した。もともと、鳥居耀蔵の一派による讒言で囚われた冤罪なので、合理的な手配である。

幽閉中も、開国・通商すべしという「嘉永上書」を書いた秋帆は、講武所師範に抜擢され、幕府の砲術訓練の指導に尽力した。

もしも潜伏先で幕吏に囲まれ自刃した高野長英が生き長らえて

いたら、ここで復権して、再登用されたかもしれない。

こうした大混乱の中、「蘭癖大名」の声らんぺきが、次第に大きくなっていく。

八月、薩摩藩さつまの島津斉彬しまづなりあきひろが艦船建造、兵書武器輸入の許可を正面切って幕府に求めた。

これに押される形で幕府は翌月、大船建造おおぶねの禁を解く。

これが蘭癖三大名の黒船建造競争へとつながり、村田蔵六むらたぞうろくは宇和島藩じまの召し抱えとなった。

一方、医の世界にも大きな変化が見られた。

長年、蘭方医を排斥はいせきしてきた漢方医の領袖たき、多紀宗家が蘭学の優れている点を取り入れようとしたのだ。そのような動きは、以前の御典医ごてんいならば絶対にあり得ないことだった。

そんな時流の変化をすかさず捉とらえるのが天下の風雲児、「早見え泰然ぜん」である。

佐倉藩主さくら・堀田正睦ほったまさよしに重用されていた彼はこの年、正式に佐倉藩侍医じいに任命された。だが家を継ぐという、しちめんどうくさい重荷からとつとと逃げ出すことばかり考えていた泰然は、すぐさま秘蔵ひぞつ子の山口舜海しゅんかいを養子にして、家督を譲ってしまった。

山口舜海は以後、佐藤舜海となり、更に改名して、佐藤尚中たかなかと名乗るようになる。

泰然は、長男の惣三郎そうざぶろうを山内家、次男の順之介じゆんのすけを松本家、五男の董三郎たかざぶろうを林家といった具合に、自分の子はあちこちの家に養子に出しておきながら、自分の家の跡取りにはわざわざ養子を取ったわけだ。何よりお家が大切、という当時の常識からすれば、信じられないような蛮行ばんぎょうである。

——親父殿は、こんなおいらを空の上で怒っておられるかな。

六年前の嘉永元年（一八四八）、七四歳で大往生した父・藤佐とうすけを思い、自問した泰然は、にっと笑う。

——いや、きっと、悪くない判断だ、と褒めてくださるだろうよ。

泰然は、佐倉で雌伏しふくする若き英明君主、堀田侯の諮問しもんをしばしば受けるようになった。

七月一日に老中首座・阿部正弘が諸侯に示した、米国が開国を求めたペリーの国書に対する意見書についても、泰然は意見を求められた。

佐倉藩主・堀田正睦けんげんも、献言けんげんを提出した。それにあたり当然ごとうの如く、泰然に諮問した。

「のう、泰然、そちには思うところがあるだろう。余がそちに成り代わり、阿部さまに話すことができるから思う存分、言うてみい。何ならそちの名前で出してもよいぞ」

すると泰然は肩をすくめて、首を左右に振った。

「堀田さま、おいらが直接、老中さまに意見を言うなんて、そんなしち面倒臭いことは御免蒙ります」

一旦、そう言い置いて、泰然は続ける。

「しかしながら、日本の立国は重要なこと。堀田さまが意見を述べれば、影響も大きいでしょう。こういう時ははずらずら書いても、たくさんの建言けんげんの中に埋もれちまいます。ここはおいらが、ばしつと一筆書いて進ぜましょう」

いずれこうなることは予見していた「早見え泰然」が、これ以上ない絶好機の到来だ、と考えたのは当然だろう。

泰然は長崎で、ニーマン商館長に聞いたことを噛み砕くだき正睦に伝えた。

「オランダや欧米には、侍という階級はございません」

そう語った泰然の脳裏のうりには、巨牛のような肥満体を揺すりながら、滔々とうとうと西洋事情や事象を教えてくれた、ニーマンの赤ら顔が浮かぶ。

「大切なことは、指揮系統を整えることです。そして優秀な指揮官を見出しその下に、勇猛な歩兵じやくそつをつけることが何よりも肝要かんようです。勇将の下に弱卒じやくそつなし、とは洋の東西を問わず真実です。それには名ばかりの武家を淘汰とうたし、再編成することが必要になるでしょう」

目を丸くして泰然の話聞いていた堀田正睦は、ぽつりと言った。

「そのような奇矯きこうなことが、果たして可能なのか」

泰然は首を左右に振る。

「奇矯なこと、ではなく、合理的なこと、です。そして、可能か、ではなく、西洋でできることが日本で出来ないはずがない、とお考えになるべきです。ただし急には無理でしょうから、徐々にやるしかありません。それでも堀田さまのように地位あるお方が、そのような西洋の思想を理解しているということは、後々に大きな影響力を持つでしょう」

「だが朝廷は幕府に、強硬に攘夷じやういせよ、と訴えているという。外国を参考にする、などという暴論が、果たして通じるかどうか」

「通らなければ国が滅ぶのみ、です。今の国力で、外国と正面切つて戦えば、清国しんのようにポロ負けしてしまうでしょう。ここは忍の一字、十年開国し、交易で国力を蓄え、対抗できるようになるより他に、打つ手はございません」

そして現在の日本の弱点を簡潔かんけつに、三カ条にまとめた。

曰く「艦船の軟弱なんじやく、大砲及び武器の不整備、弱兵」である。

そのような経緯を経て、泰然が堀田正睦に提出したのが、泰然の「開国の議」である。

——外国と日本を比較した場合、日本の戦艦は遙はるかに軟弱で、大砲及び器械は不整備であり、長年平和に墮だし弱兵である。それ故ゆえに開国交易なを為し、十年の後を期きすべし。

簡かんにして要よう。

まさに「寸鉄すんてつ人を刺す」の至言しげんだった。

その寸鉄が老中首座・阿部正弘の心をも打ち、堀田正睦を老中として城内に返り咲かせたのみならず、安政二年（一八五五）には、彼に老中首座の地位を譲ることになるのである。

だがそれは決して泰然が、独自に見出した見解ではない。

その源流をたどれば、渡辺崋山かざんや高野長英が自由闊達かったつに議論を戦わせた、尚齒会しやうしかいにおける共通認識だったのである。

こうした直言ちやくげんをしつつも、泰然は懐手むすこみでで、しきりに首を捻ひねった。——なんだか、妙くりんなことになってきやがったもんだ。おいらが偉そうに時勢や政治を講釈こうしゃくするなんて、らしくねえ。くわばらくわばら。「早見えの泰然さま」としては、とつとと逃げ道を見つけておかないとまずいだろうな。

泰然は、藩主に取り立てられ召し抱えられるという、武士ならば泣いて喜ぶ名誉を受けながら、早速そこからの逃げ道を、頭の中で探し始めていた。とんでもない側近そっきんである。

だが、今すぐに逃げ出そうとしなかったのには、泰然なりの計算があった。

——堀田さまのような優れたお方を教育して、てっぺんを取っていただくのが、世の中を変えるには一番手っ取り早い。これからは堀

田さまが、江戸の改革の中心になっていくのは間違いないだろう、いや、そうなるてもらわないと困る。

しかし、人の言に耳を傾け、正しい判断をするという点では、極めて英明な堀田侯だが、彼には大きな弱点があった。口下手で押し出しが弱く、自分で融通無碍ゆうずうむげの判断をし、瞬時に動くという類たぐいのが苦手だった。議論で相手を説得し、物事を進めていく場では、とたんに無能になってしまう。つまり対面の交渉事には向いてなかったのである。

その点、口八丁手八丁の泰然が側に居れば、そんな堀田侯の欠点を補完できた。

以後、幕府は、開国に向け次々と画期的な決断をしていく。

それは堀田正睦の立案であり、背後には泰然ひかが控えていた。

ここまで来て、泰然はさすがに肚はらを決めた。

藩の軍政を整えた英明な藩主、西洋堀田の智恵袋として、現在の国際情勢を叩き込み、佐倉藩を開国主義きゆうせんぼうの急先鋒に仕立て上げようと決意したのである。

そのため医学関係は養子の尚中に任せ、完全に分業制を採った。

しかし、と泰然は思う。

——藩主さまに偉そうに助言する立場になっちゃったが、おいらだおぼつかって自分の足元は覚束ないときたもんだ。まさか順の字が、あのよ

うに思い惑う性質だったとは、笑つちまうぜ。

苦笑した泰然は、ぼそりと呟く。

「佐藤家は代を重ねていくごとに小粒になりやがる。まったく、困ったもんだぜ」

次男の順之助は、盟友の松本良甫の養子に出し、名前も松本良順と改名していた。奥医師の世継ぎとして城内に出仕している。

腕白な順之助が着慣れぬ十徳を身に纏い、神妙な面持ちで登城している様を思うと可笑しいやら哀れやらで、複雑な気持ちになる。

城内でも蘭方上りの外れ者と見做され漢方の連中にいびられて
いるらしい。

やられっぱなしで唯々諾々としているとは、わが佐藤家の男子としては、なんとも情けない。

夫婦仲が円満なことだけが救いだった。それと、順天堂では持て余した島倉伊之助という異才を、うまく使いこなしている点も、見事というべきか。

そう考えれば泰然の、順之介に対する評価は厳しすぎる、ともいえた。

このように東で泰然が次男の将来について思いを巡らせていた頃、西では洪庵も、やはり同じように、後進や子どもたちの件で悩んでいた。

泰然と洪庵の人生は、なぜかしばしば交錯こうさくし同調したが、この時
も合わせ鏡のように、好一對こういつついを成したのだった。

*

嘉永六年、世は風雲急ふううんを告げている。それなのに、俺って奴は……。
伊藤精一は唇を噛む。

塾を破門され、あつという間に二カ月が経った。

巷ちまたには、早くも秋風が吹き始めている。
せつかく、塾頭になれたのに。

芋を洗うような大部屋から、上級者と塾頭の「清所」に移れたのに。

これでは左内さないに合わせる顔がない……。

いつかこんな不始末ふしまつをやらかすかもしれない、と自分でも、うす
うす思っではいた。けれども二十八にもなって、酔った挙げ句、町

人と喧嘩騒けんかぎを起こすとは、なんとも情けない。

あれは忘れもしない。三カ月前の六月十二日の夕方のことだった。

雷が鳴り響く土砂降りの中、攘夷じやういかぶれのゴロツキ連中が、適塾てきじゆく
生に因縁をつけてきた。

さりげなくやりすごすのが賢いということは、今ならわかる。

だがあの時は塾頭として新入の塾生を引き連れ、牛鍋屋ぎゅうなべやでご馳走ちせう

してやった帰り道だった。

塾頭になると新入生から、なにがしかの束脩料そくしゅうりょうをもらえる。それが嬉しくて精一は、馴染なじみの牛鍋屋に、新入生を引き連れて向かったのだ。

そこで喧嘩をふっかけられた精一には、逃げ腰の自分を見せたくない、という見栄があった。だから喧嘩は弱いくせに、虚勢きよせいを張った。だがそれだけなら軽いお咎めとがで済んだだろう。

適塾生は喧嘩っ早い連中が多く、鬱屈うつくつを抱えている身では、つい手が出てしまうことはよくあることで、合水堂がっすいどうの塾生との小競り合いなど、日常茶飯事だった。

それより問題視されたのは、精一が、適塾の蔵書を机の上に出しっぱなしで出掛けたことだ。その砲術書はなくしたら、二度と手に入らないかもしれない貴重な書で、適塾にとって大損害になりかねない。

そこに乱闘騒かんかぎが加味され「看過かんかできることではない、塾頭失格だ」と洪庵に厳しく叱責しつせきされ、精一の頭の中は、真っ白になった。それが七月一日のことだ。

とりあえず中環宅なかつたまきでの謹慎を命じられた。

自分が入塾したのと同じ頃に雇われ、お互い心やすく思っているお手伝いのお鹿しかの、心配そうな顔が目に浮かぶ。

だがそこで、中耕介なかこうすけにも詰問きつもんされてしまったため、いたたまれなくなつて、四日後に逐電ちくでんした。

喧嘩騒動の直前の六月三日には、米国の黒船四隻が浦賀沖に姿を現し、来春再び来航するとペリーが言い残していったため、世は大騒ぎになつていった。

その余韻よゐんが漂ただよう大坂の巷ぼうぜんを茫然さまよと彷徨い、気がつくとなぜか四国おおすの大洲おおすにいた。どうしてそこにたどりついたのか、覚えていない。だが自分が四国を目指したことはないと思ひ当たる節がある。

ペリー来航の数日後、宇和島藩うわじまから適塾に使者がきた。宇和島の伊達だての殿さまが蘭学に習熟した人物を登用したい、という。聞けば、宇和島の名医・二宮敬作にのみやけいさくの斡旋あつせんだという。

そこで洪庵は、故郷で村医者をしている村田蔵六むらたぞうじくを推薦していた。それを傍かたわらで聞いていた精一の耳に、そのやりとりが残っていたため、彼の足を四国へと向けさせたのかもしれない。

自分が入塾した時の塾頭で、故郷に帰っても洪庵の信頼厚い、親友の蔵六に取りなしてもらうしか、適塾に復帰できる見込みはないと、精一は思ひ詰めていた。四国行きは、最後にすがつた蜘蛛くもの糸だった。

蒸し暑い夏、精一は大洲で医家の手伝いをして過ごした。名医で名高い山本有中、適塾の塾頭を務めていた精一を厚遇してくれた。

だが、待てど暮らせど一向に、蔵六が現れる気配はない。

風に秋の気配を感じた頃には、温暖な気候と優しい山本有中の下で医業に勤しんでいるうちに、大洲の地に骨を埋めるのも悪くないか、などと思い始めていた。

そんな風に精一の気持ち揺らいでいたある日、村田蔵六は大勢の付き人と各地の医師を引き連れて、ようやく大洲に姿を現した。

落ちぶれた精一の目には、蔵六の様子は殿さまのように映った。

「おや、精一さんではありませんか。こんなところで何をしているのでありますか？」

太い眉の下の大きな目をぎよろりと剥いて訊ねられ、精一は嗚咽した。

蔵六はその姿をぼんやりと眺めていた。

なぜ泣くのか、などとは考えない。蔵六には人の情がわからないところがある。

しばらくして、落ち着きを取り戻した精一から事情を聞いた蔵六は、あっさり言う。

「洪庵先生の処分はごもつともありますが、ふだんの先生からすると、やや厳しすぎるようにも感じます。おそらく黒船来航で騒然としている世情も影響したように思えますな。洪庵先生は何より諍いが嫌いなお方、だが世は、外国と争うことになりそうな勢いであ

ります。それが精一さんの処分に重さを加えたのではないでしょう
か」

今さらそんな風に冷静に分析されても、意味はない。

精一は鼻水をすすりながら、懸命に訴えた。

「お願いだ、蔵六。塾頭から俺が塾に復帰できるように、取りなして
くれないか」

「私は塾頭ではなく、元塾頭です。それに洪庵先生の手紙にも書いて
ありましたが、今は精一さんが塾頭を務めておられるではありませんか？
つまり私を塾頭と呼ぶのは二重の過誤かじであります。精
一さんは、よほど動揺どうごされているとお見受けしますな」

「動揺どうごしてるし、混乱こんらんもしてる。蔵六が最後の頼みたのの綱つななのだ」

腕組みをして瞑目めいもくし、しばし考え込んだ蔵六は、あっさり言った。

「わかりました。他ならぬ精一さんのためです。手紙の一本くらい、
今すぐ書いて進ぜましょう。それを持って直ちに大坂に向かわれる
のがよろしいかと。善は急げ、と言いますから」

相変わらずどこか一本、螺子ねじが外れているみたいな物言いに戸惑
いながらも、精一は深く頭を下げて感謝した。

「恩に着る。でも俺は蔵六が宇和島に入城する晴れ姿を見届けて、
洪庵先生にご報告したい。できれば蔵六の露払いつゆはらいをさせてもらえな
いだらうか」

「精一さんがそうしたいのなら、私は構いません」

蔵六は恬淡てんたんとしたものだ。

翌日。

大洲を出立した蔵六の一行は、伊予松山いよまつやまの名医・藤井直一、伊藤が世話になった大洲の山本有中やまのむねちゆう、卯之町うのまちで医業をしていた推薦者の二宮敬作という四国を代表する名医を従えた、麗々しいものとなった。

蔵六の乗った駕籠かごの先頭を、馬を借りた伊藤精一が露払いをした。行列は、狭い宇和島の街を賑々にぎやかにしく練り歩き、人々を驚かせた。

はるばる大坂から蘭学の達人の医師が宇和島にやってきた、とたちまち大評判になった。

ただし村田蔵六が海城の宇和島城に呼び出され、藩主・伊達宗城むねなりにじきじきに申し渡されたのは、蘭医として仕えることではなく、沿岸を守る砲台と蒸気で走る黒船を作ることだった。

それは蘭癖大名の御三家、薩摩の島津斉彬、佐賀の鍋島閑叟なべしまかんそう、宇和島の伊達宗城が、浦賀の黒船を見て、これを自藩で作る競争をしよう、と誓い合ったことに端を発している。

万事に無頓着むとんちゃくな村田蔵六は、その無理難題をあつさり受けた。

年が明けて嘉永七年（一八五四）二月。

伊藤精一は、蔵六の手紙を懐ふところに、大坂へ向かう船に乗り込んだ。船着き場に下りた精一の目に、なつかしい大坂の雑踏ざっとうが広がっていた。

大坂という街はこんなに人がいたのか、と改めて感じながら、過か書町しよへ向かう。

だが、その足取りは重い。果たして洪庵先生は、自分をお許しになつてくださるだろうか。

おそろおそろ適塾を訪れると、洪庵の書齋に招き入れられた。そこには師の、懐かしい笑顔があつた。

「ちようどいいところに戻ってきてくれたな、精一。明日から名塩なじおに行こうと思つていたが、手が足りなくて困つていたのだ。お前が同行してくれると助かる」

「名塩なえというと、八重奥やえさまのご実家ですね。何かあつたのですか？」

「名塩なえの木戸六三郎殿きどろくさぶろうが病やまいになつたので、診察に行こうと思つてな。長崎留学の時、舅殿しゅうとの斡旋たのもで頼母子講たのもしこうに加わつてくれた恩人で、お鹿の父上でもあるのだよ」

洪庵は、人の恩は決して忘れないことで知られていた。多忙を極める中でも、自分を長崎に行かせてくれた人々には恩返しをするため、最優先で対応していたのだ。

「あの、破門された俺がご一緒しても、よろしいのでしょうか」

「もちろんだ。お前が来てくれれば百人力だよ」

笑顔でそう言った洪庵は、続けた。

「少しは反省したようだな。飲むな、とは言わない。だが自分を見失ってしまうような深酒はやめなさい。それと修学については初心に帰ってやり直すこと。それを約束できるのなら、復学を許そう」

伊藤精一は、へなへなとへたり込む。

蔵六からもらった手紙は懐に入れたままだ。なのにもう自分が戻ってくるのを予想していたみたいだと思ったら、洪庵は種明かしをした。

「実は蔵六から早飛脚はやひきやくで書状が届いてね。宇和島出仕の報告かと思いきや、伊藤のとりなし状だった。『本人は深く反省し、心を入れ替える所存故、なにとぞお許しくださいますよう』などと、優秀な塾頭にそこまで頼まれては、嫌とは言えないだろう」

伊藤精一は懐の中の手紙を握りしめた。蔵六の心遣いが染み入る。

「ありがとうございます。俺は終生しゆうせい、酒は二度と口にせず、初心に帰り勉学に励みます。そのため今から『慎蔵』しんぞうと改名し、名を呼ばれるたびに断酒の誠いましめを思い出すようにします」

畳たたみに手を突ひれふいて平伏した伊藤精一改めて伊藤慎蔵は、号泣した。すると部屋の外で耳をそばだてていた塾生たちが、歓声を上げて、

書齋になだれ込んできた。

彼らにもみくちやにされた慎蔵の顔は、涙でくしゃくしゃになつた。

部屋の外から、心配そうに胸に手を当てた、お鹿の顔ものぞいて
いる。

その様子を眺めながら、洪庵は、ひそかに胸をなで下ろした。

もともと破門するつもりなどなかった。気の緩みが見えたから「頭を冷やせ」と言おうとしただけだ。誰より大事に思っていたからこそ、厳しくお灸を据えたつもりだった。

師匠筋の中家に預けたのも、そこで頭を冷やして反省させるためだった。

それなのに、そのまま逐電してしまうとは、夢にも思わなかった。

洪庵は内心、反省していた。

——ワテのようなええかげんなもんが言いつけた破門を本気にするなんて、あほボンやな。

かつての師匠の言葉が、底抜けの笑顔と共に、脳裏に浮かぶ。

——自分が破門された時のことを真似てみたが、天游師匠と違って、生真面目すぎる私は、言葉がキツすぎて、無用に弟子を追い詰めてしまったようだ。

翌日、洪庵は慎蔵ともうひとりの塾生、そして臨月の八重と女中

のお鹿を連れて、名塩へと向かった。

名塩では洪庵と慎蔵が熱心に見たおかげか、たちまちお鹿の父は快癒した。

ある日、慎蔵はお鹿と一緒に、名塩の丘に登った。

ふたりは言葉を交わさなかったが、お互いの気持ちはわかっていくような気がした。慎蔵とお鹿の頬を、柔らかい風が撫でていく。「いいところだな」と慎蔵がぼつんと言うと、お鹿は「へえ」と微笑してうなずいた。

八重は名塩に残り翌月、十番目の子・十郎(後の惟直)を産んだ。復学した伊藤慎蔵は以前に増して修学に励み、やがて塾頭に復帰したのだった。

嘉永六年十二月、ロシア使節プチャーチンが再来日して長崎に投錨すると、待機していた川路聖謨ら幕府の外交団と交渉を開始した。世はいよいよ騒然とし始めた。

きな臭い世情を反映してか、適塾でも医学の修学よりも、兵学や砲術の習得の方に熱意を持つ塾生が増えつつあった。しかし適塾には兵学や砲術の蘭書は少なかつたため、古株の武田斐三郎や久坂玄機は適塾を去り、江戸で伊東玄朴の「象先堂」に入塾し、佐久間象山や箕作阮甫に師事して兵学を修めた。そしてその武田斐三郎は幕

府の要請で、箕作阮甫と共に長崎に派遣され、外交対応に専念している。

嘉永七年三月、「日米和親条約」が締結された。幕府は米国に膝を屈したので。

条約は「通商は拒否するが、下田と箱館の二港を開港する」という内容だった。

こうして二百年の長きにわたった「鎖国」は、終焉を迎えた。その事実を幕府は極秘にしようとしたが、どこからともなく情報は漏れ、幕府の弱腰と狼狽ぶりが露わになった。そして不平等条約を拙速で締結したことに対し、批判が高まっていく。

徳川斉昭は、条約締結を不服とし、幕府海防方を辞任した。

彼は、本居宣長の国学を推し進めた水戸学の創始者、藤田東湖を腹心に据え、尊王攘夷派の精神的支柱となっていく。

後の安政二年に入塾する中津藩の郷士・福沢諭吉も、長崎留学で砲術を学んだ口だ。

中津藩藩主・奥平昌高は薩摩藩主・島津重豪の次男で、父同様に蘭学を好み、江戸・鉄砲洲の中津藩中屋敷に和蘭室を設けた。

ゾーフやシーボルトが江戸参府した際もしばしば面談したという、筋金入りの蘭癖大名のひとりだ。

諭吉は家老の息子に随行して長崎で蘭語や砲術を学んだが、優秀

で煙たがられ、帰郷するよう仕向けられた。長崎に居づらくなった諭吉は、江戸に向かう途中の大坂で、洪庵の「適塾」に入門したのである。

そんな風に、蘭学が次第に医の領域からはみ出していく趨勢を、洪庵は複雑な気持ちで眺めていた。

自分としては医術以外によそ見をしてほしくないが、全ての塾生が医術で身を立てられるわけでもない。

ならば、塾は間口を広く取るしかないだろうと、無理に自分を納得させるしかなかった。

適塾の初心は、貧しいひな鳥たちを保護する、広い庵を目指すものだったのだから。

洪庵の姉の子で、藤井家の養子になり神官になった藤井高雅が、国政を憂い諸事に奔走し始めたのもこの頃だった。

そんな甥の様子を見て、危なげだと不安に思いつつも、洪庵は黙って見守るしか術がなかった。

そんな時勢を反映してか、洪庵のところには、期せずして幕政に関する情報が集まってきた。

中には、彦根藩の開国に関する意見書という、外部に漏れてはならない情報もなぜか洪庵の手元にあった。

その情報を求め盟友の広瀬旭荘が立ち寄った際、洪庵が不在だっ

たため、在宅していた八重が独断で書簡しょかんを見せている。

自分の意に反して、動乱の時勢の真っ只中に放り込まれてしまった観のある洪庵は、自分に不向きな判断を求められることもしばしばあった。

そんな時、洪庵は途轍とてつもない孤独感と焦燥感しょうそうに囚ひわれてしまう。

そんな中で、八重は心強い盟友として、洪庵の活動を支えた。

八重は、洪庵とは一心同体の、誰よりも信頼できる同志となっていたのである。

洪庵にとって八重の存在は、大いなる救いだったのである。

嘉永七年（一八五四）九月十九日の朝。

洪庵に呼ばれた伊藤慎蔵が書齋に入ると、師の隣に袴かみしもを着た武士が座っていた。

「こちらは大坂奉行所の与力よりきさんだ。実は昨日、天保山沖てんぼうざんにオロシアの艦船『ディアナ号』が停泊し、露人が交渉を求めてきたそうだ。

そのため奉行所にオランダ語の通訳を頼まれた。私の名代で交渉の通訳をしてきなさい」

「俺が、ですか？ 俺にそんな大役が務まるでしょうか」

「慎蔵は適塾の塾頭だよ、お前の他に一体、誰がやれるというのだ」
慎蔵は考えを巡らせる。

ここは普通に考えれば、師の出番だ。だが得体の知れない蛮族ばんぞくの突然の訪問に、いきなり師を出すわけにいかない。

洪庵は浪速なにわの、いや、日本の切り札なのだ。

ここは自分が露払いを果たすべきだろう、と思った。

一方、洪庵は洪庵で、全く別のことを考えていた。

——私は蘭語の会話には自信がない。

洪庵は視覚的な人間だった。

以前、オランダ語を読んでいると、言葉が魚のように泳ぎ出す、と言ったことがある。だがそれは紙面の上のこと。音読してもなかなか言葉と一致しない。

だから通訳だと、とんでもない不始末をしでかしてしまうかもしれない。弟子がオランダ語の単語を日常会話に差し挟んでいるのを耳にすると、いつも不思議な感じがした。

それと、今回はただ単に、会話を通訳すればよい、というわけではない。オロシアの艦長の言葉を、その政治的意図までを含めて、奉行に伝える必要がある。

そうしたことは、規則を遵守じゆんしゆすることが基本の自分には、正直言
って荷が重すぎる。

その点、大切な蘭書を放り出して呑のみに行き、町のゴロツキと大立ち回りまでしてしまうというでたらめができる慎蔵はまさにうってつけ、適材適所に思われた。

——この交渉には、そうした野放図のほうずなふてぶてしさこそが
必要なのではないか。

こうして師と弟子は全く違う思惑おもわくながら、期せずして判断が一致した。

慎蔵は、もう逡巡しゆんじゆんしなかった。

蔵六の宇和島入りの時と同じく、自分の役目は適塾の露払いだ、

と割り切った。

慎蔵は二階に行き塾生をたたき起こすと、彼らから紋服を調達し、大小を腰に差した。

貧しい塾生は、たいてい大小を質入れしていた。なので一組の大小だけ手元に残し、正式な行事がある時は、それをみなで使い回していたのだ。

「行って参ります」と挨拶すると、門口に立った女中のお鹿が、火打ち石を切る。洪庵と八重が揃って、門口で慎蔵を見送る。

背中に感じる塾生たちの視線がこそばゆくも誇らしい。

気がつくくと、塾生がひとり、お供のような顔をして付き従っている。宇和島藩の侍医、二宮敬作の次男、二宮逸二だった。父に似て大酒飲みの逸二は、特に慎蔵と蔵六に可愛がられていた。慎蔵に輪を掛けた、やんちゃな暴れん坊だ。

慎蔵は苦笑して同行を許した。ただし「近くまで一緒に来るのはいいが、奉行にお目通りはさせられないぞ」と釘を刺すのは忘れなかった。

奉行所に到着すると、すでに編成された部隊を、大坂城代が差配していた。

各藩の蔵屋敷からも留守役が兵を引き連れ、天保山に向かって発しているという。

兜かぶとに陣羽織じんばおりという重装備で砲台に向かう武士に、鉄砲をかついだ軽装の歩兵がつき従う。

これまで見たこともないような光景に武者震むしゃぶるいをした慎蔵は、「まるでこれから合戦でも始まるようだな」と隣となりの逸二に言った。

一介の蘭学者がその先頭に立つとは、これも時代の流れだろう。

出発前、洪庵は手短てみじかに長崎の対応の仕方を教えてくれた。長崎に寄港した時は、こうしたこと程度ではさほど騒ぎにならなかったとも聞いた。

「英国のフェートン号が長崎に不法侵入した時は、蘭商館のゾーフ殿と蘭通詞が相談し、対応を判断した。慎蔵は、その時の蘭通詞と同じ役割を果たせばよいのだよ。お前の後ろには私が控えているから心配するな。対応に悩んだら保留して持ち帰り、陣営じんえいでゆっくり検討すればよいのだ。肝要なことは、相手の言い分を正確に理解し、誠実に訳すことだ。それに撤てつすることだ。そうしても、通訳次第で交渉の中身も変わってくるものなのだ」と洪庵は言った。

こうした臨機応変の対応には、慎蔵のような大胆な性格が向いている、と洪庵は確信していた。

「これから先は、こうした仕事が増えていくに違いない。だから日頃から変事に備え、気持ちを固めておくことが大切なのだ。世の中の諸事は万事、常在戦場じょうざいせんじょうだ。適塾での会読だと思って臨めばどうと

いうことはないよ」

洪庵の言葉は力強く、慎蔵を勇気づけた。

今の慎蔵には、師の言葉が支えだった。

奉行所が率いる、諸藩が供出した部隊が陣取っている天保山は、天保年間に安治川を浚えた時に出た土砂を積み上げて作られた人工の丘だ。

そこには灯台代わりに、高灯籠が安置されている。

その小高い丘から三本マストのフリゲート艦であるロシア軍艦「ディアナ号」の威容が見えた。

長さは百メートルを優に超え、大砲を五十二門も備えている。船員は六百名近くいるようだ。

当たり前のことだが、蘭書で読んだ軍艦の仕組みと同じだな、と伊藤は改めて感心した。

巨大な軍艦の登場に、大坂の街は、上を下への大騒ぎとなっている。ところが対処するのは付近の岸和田や尼崎の藩兵たちだ。彼らは精一杯武装をし、藩旗を立てているが急ごしらえで統率が取れていない。

軍艦から小舟が降ろされ、ロシア人水兵が数人、乗り込んだのが遠目に見えた。

小舟は次第に近づいてきたので、陣営に緊張感が走る。

「通詞殿、ついて参れ」と言われ、慎蔵は与力の後を追って走り出す。

着岸した小舟を降りて、ロシア水兵が上陸しようとしていた。そこに駆けつけた慎蔵が、オランダ語で懸命に話しかける。

押し問答を重ね、ようやく慎蔵の意図を理解した水兵たちは、小舟に戻りすぐすごと旗艦きかんに帰っていった。

オロシアの使節が親書を渡しに来た、という目的を理解し、船員の行動を抑えることができた慎蔵は、とりあえず喫緊きつきんのお役目は果たせたようだな、と胸をなで下ろした。

これで露払いの慎蔵のお役目は済んだ。次はいよいよ師・洪庵のお出ましを願う番だ。

肥後ひご、薩摩、宇和島藩の藩兵も警備に加わり、天保山周辺は人々の出入りが禁止され、明々と篝火かがりびが焚たかれ、陣屋で寝ずの番をしていた。

そんな中、適塾に使者を出し、洪庵に概要を告げ、お出ましを願った。

慎蔵はその夜は陣屋に泊まった。翌朝、洪庵は礼服に二本差しの、正装で現れた。

慎蔵の目に、師の姿は頼もしく映った。

「ここは師匠のお出ましを願うしかありません」と慎蔵は言う。

「同行はするが、実際の交渉の通訳は慎蔵に任せる。私はオランダ語の会話が苦手だね」

それは、謙遜けんそんではなかった。かつて長崎留学した時、泰然に勧められた出島見学を断ったのは、会話が苦手だったせいもある。そのことは、これまで秘してきたのではあるが。

「慎蔵は思い切りがよい。それは若者の特権だ。これからの日本に関わる大切な通訳だから、年寄りの私ではなく、若いお前が対応するべきだ」

慎蔵と洪庵、与力はロシア船に乗り込んだ。

昨日とは違い、背後に師の存在を感じる。心強さが全然違う。

艦長室に招かれた慎蔵は、ロシア艦隊艦長プチャーチンと与力の交渉の通訳をした。

プチャーチンは紳士的で、彼が告げたことは、昨日水兵たちから聞いたのとほぼ同じだった。

「当方は通商交渉を望むが、ダメならせめて公文書を受け取ってほしい」というものだ。

だがそれに関して、大坂奉行に決定権はないので、江戸にお伺うかがいを立てるしかない。早馬を出し、洪庵と慎蔵は適塾で待機となった。

江戸からの返事が来た時点で、また呼び出しがあるかもしれない。

交渉で重要なのは次回だが、江戸からの返事を伝えるだけなので、

洪庵の得意な書面对応が主になる。

大役を果たした慎蔵はようやく気が楽になった。

数日後に届いた信書には、大坂では交渉できないので、下田に回航せよ、という返事だった。

ロシア軍艦はおとなしく、天保山沖から立ち去った。

この間、洪庵は長崎で対露交渉に当たった昔の門人、武田斐三郎に状況を尋ねている。

斐三郎は日露間の国境画定の交渉のため、蘭語の地理書を翻訳しているという。

その返書を読んだ洪庵は、シーボルトが御禁制ごきんせいの地図を国外に持ち出そうとして、清書を頼まれ、師匠の中天游いのすけが伊之助に印刷させた時のことを思い出す。

若き日の洪庵はふたりの師匠の決定に異議を唱え、一時破門されたことがあった。

——こうなってみるとやはり、あの時の私の判断は間違いではなかったのだ。

その後、長崎でロシア使節と対応し、交渉に当たった川路聖謨は、樺太からふと・択捉えとつとの全島支配を目論もくろんだロシアに対し、択捉島までと樺太の半分は日本領であると主張し、日露和親条約に反映させた。

その主張を裏付ける根拠になったのが、松平定信さだのぶが発禁処分にし

た林子平の「三国通覧図説」だったのは、なんとも皮肉なことだ。そして武田斐三郎の適切な対応がものをいったことは間違いない。

だがそうした情報を洪庵は、あえて慎蔵には伝えなかった。

余計な情報があると却^{かえ}って、通訳に濁^{にご}りが生じてしまうことがある。

洪庵はそのことを恐れたのだ。

今回の騒動で、適塾の盛名はますます上がり、「浪速に適塾あり」と知らしめた。そして日本各地から蘭学を志す青年が押し寄せてきた。

混乱期には、権威と新興勢力のせめぎ合いが起こる。

そうした相克^{そうこく}は医学界にも出現した。

押される一方の漢方医は巻き返しを図り、その年の十月、漢方の総元締め^{やすより}の多紀氏が老中を動かし、なからい宮廷医官半井氏が秘蔵する丹波たんば康頼撰の「医心方」いしんぼう原本を提出させ、漢方の再興を目指した。だがいかんせん、それは時代の要請とはかけ離れたものであったことは否めない。

一方この時、蘭学の勢力拡大のために機敏に動いたのが、今や蘭学の大御所となっていた伊東玄朴である。

嘉永二年（一八五〇）の「蘭方医学禁止令」の時、医学書も厳しい統制を受け、漢方の総本山である「躋^{せいじゆかん}寿館」が刊行決定の権限を

握った。このため蘭医書の刊行は長年滞っていた。

ところが玄朴はペリー来航の衝撃の間隙をつき、このお達しを空文にしてしまった。

玄朴は、自分の患者である幕府の若年寄、遠藤但馬守の許しを得て、多紀楽真院の認可を得ずに、大槻俊斎が翻訳した「銃創瑣言」の刊行を強行してしまったのだ。

黒船の武装を見て動揺する旗本に、蘭書の銃創治療の項を抄訳した書は、緊急に刊行する必要があると吹き込んだのだ。

こうして幕府は規則を曲げ、「躋寿館」に諮らずに公刊を許した。佐賀藩の匙医だった玄朴は、錚々たる人脈を誇っていた。

玄朴の患者の中には、伊豆代官の江川英龍もいた。

英龍は天保十年（一八三九）、時の老中首座・水野忠邦に浦賀湾の測量を命じられた海防の専門家であり、嘉永二年には下田沖で勝手に測量を始めた英国測量船マリーナ号に、丁寧な応対をして退去せしめた剛胆英明、具眼の士で、今や幕府の海防の要石を果たしていた。玄朴は、動乱の世を動かす政医の地位に就いていたのである。

嘉永七年も暮れつつあった十一月、日本は立て続けに、末世を思わせる大災害に襲われた。

四日に東海道、東山道、南海道に及ぶ大地震が起きたのだ。

太平洋沿岸を大津波が襲い、東海道の富士川が氾濫した。

倒壊し流出した家屋八千三百戸、焼失家屋三百戸、死者一万という大災害になった。

翌五日には伊勢湾から九州東部にかけて大地震が発生、土佐、阿波、紀伊の三国が甚大な被害を被り、全壊が一万戸以上、火災で六千戸が焼失した。

この時、大坂湾も大津波に襲われ、海岸沿いに停泊していた北前船や江戸回船など、巨大な千石船が碇を切って潮に流され、道頓堀などの川筋に入り込み、次々に橋を破壊していった。多くの人々が瓦礫の下敷きになり、地獄絵図を呈した。この時の流失戸数は、実に一万五千戸に達したという。

不幸中の幸いで、適塾の被害は軽微だった。大地震の後、貴重な蔵書は土蔵にしまい、炊き出しで米を大量に炊いた。塾生は近くの家の家財道具を運び出すのを手伝ったりした。

洪庵の気がかりは、翻訳し終えていたが未だに刊行の目処がつかない「扶氏経験遺訓」の原稿だった。これを出版せずに失うようなことになったら、死んでも死にきれない。

一刻も早く出版したい、という焦りの気持ち立ち上ってくる。

だが今は災厄を乗り越えることが何より優先だった。洪庵は気持ちを押し隠した。

この地震で、浪速から下田に回航していたロシア軍艦ディアナ号が大破し、沈没した。幸い乗務員は全員無事で、日本で新たな船を建造し、帰国することになった。

こうした災厄や、黒船来航による鎖国の終わりなど、縁起の悪いことが続いたため、幕府は改元を決意する。

嘉永七年十一月二十七日、西暦で一八五五年一月十五日、嘉永から安政に改元した。このため安政元年は一カ月ほどしかない。

「群書治要」の「庶人安政、然後君子安位矣（庶民が生きやすい世ならば、治める君子も安らかである）」が出典だった。

だがそんな幕府の切実な願いも空しく、改元翌年の安政二年十月二日に、三度目の大地震に見舞われてしまう。

江戸の死者は七千人を数え、水戸藩の攘夷論の中心人物・藤田東湖が、江戸の藩屋敷で圧死の憂き目に遭う。

以後、水戸藩の攘夷派は抑えが利かなくなって迷走を始め、幕末の混乱に一層拍車をかけることとなる。

また、坪井信道の「安懷堂」と「日習堂」は信道の死後、養子の信良が継いだ。この大地震で建屋は崩壊し、大津波で壊滅的状态となり、安政三年（一八五六）に閉塾となる。

この「安政の三大地震」が象徴する安政時代、世の乱れは一層酷くなった。

民の心情は末世まつせを思わせる惨状さんじょうから厭世観えんせいかんに囚われ荒すさんでいき、徳川幕府は終焉まつせに向けて、加速度を上げて突き進んでいく。

伊藤慎蔵が塾頭に復帰したのは、それまで塾頭だった渡辺卯三郎うさぶろうが、故郷の加賀・大聖寺だいしやうじに帰郷を決めたためだ。

渡辺卯三郎は生真面目で、洪庵は彼の徳の高さを心底畏敬いけいし、信頼も厚かった。

その四角四面の生真面目さは、どこか自分と似たところがあるとも感じていた。

そのため元服前げんぷくのふたりの息子、平三へいざうと四郎の教育を任せたいという気持ちになった。

都会は誘惑が多く勉強に集中できないが、田舎の大聖寺なら雑音も少ないだろう、と洪庵が判断したのは、反面教師がいたからだ。

伊東玄朴や坪井信道は、適塾に養子を預けたが、彼らは都会の誘惑に負け、あるいは適塾の過激な修学に適応できず、退塾していたのだ。

ならば適塾で厳しく鍛えればいいではないか、という意見が出てくるかもしれない。

確かに平三や四郎は、親の影響で門前の小僧習こぞうわぬ経を読む、オランダ語に関しては新人の塾生と比べれば、一日の長いちにちのながはある。だが

親の威光でおだてられ、実力を過信してしまうという恐れが常につきまとう。それに加えて、オランダ語を学ぶためには、漢文に習熟することが早道だと洪庵は考えていた。それは師・宇田川玄真うだがわけんしんの薫陶くんとうでもあり、洪庵自身もその教えに従い、長崎留学では唐通事とうつうじの穎川えがわ四郎八殿しろうはちに漢詩の手ほどきを受けている。

実際、漢文に習熟することがオランダ語の修得に役立つという実感があった。

日本語とは似ていないオランダ語の構文は、漢語とは構造がそっくりだった。

塾生の中には「レ点を打てばよろしいのでは」などと言いつ出す初学生もいて、目から鱗うろこが落ちる思いをしたこともある。加えて漢文の素養そようは当時、仕官する上で必須の教養でもあった。

ならば若い頃に、徹底的に叩き込んでおいた方がよい。

漢文の造詣が深く、漢詩の達人でもある渡辺卯三郎は、まさにうってつけの人材だった。

ところがそれに対して、思わぬ反対があった。

八重が珍しく、洪庵の決めたことに異を唱となえたのだ。十一歳と十歳の少年は、家から出すにはまだ幼なすぎる、と言うのである。

それはそうかもしれない、と迷った洪庵は、こちらも珍しく、少
しだけ折れた。

本人の意志を確認し、その決定を尊重することにしたのだ。

八重が訊ねると、平三はしばらく考え「父上が行けとおっしゃるのなら、大聖寺へ参ります」と答えた。それを聞いたひとつ下の四郎も、「兄者が行くなら、わても行く」と言った。

八重は、男の子は知らぬうちに大きくなるものなのね、と頼もしく育った息子たちの姿を見て、少し淋しく思った。

十一月末、兄弟ふたりは、仲良く手を携えて旅立って行った。

安政の世の始まりは末世を思わせ、暗いものだった。

だがそんな退廃した空気の中、洪庵が率いる適塾は光り輝いていた。その一灯を求めて、続々と優秀な新入生が蝟集してきた。

象徴的な存在が、適塾の双壁と称された二人である。

ひとりには安政元年入塾の肥前国大村藩の藩医の一粒種の長与専齋ながよせんさい。もうひとりは翌年入塾した中津藩蔵屋敷の役人の次男、福沢諭吉である。

長与専齋の祖父の長与俊達しゅんたつは、かつて大村藩で大規模な人痘接種しゅを行なった人物である。専齋は後に新政府の要人となり衛生局を立ち上げ、「日本の衛生行政の父」と呼ばれる。

福沢諭吉は適塾で修学後、江戸に出て英学を独習し、二度の欧米視察に潜り込む僥倖じやうけいを得た後、英学に転じて日本の最先端を突っ走

り、国論を誘導して文明開化を先導していく。やがて福沢は、言論人、文化人、教育者という多面的な文化活動の頂点に立つ。

洪庵はこの二人の英才が入塾した以後、いよいよ適塾を単なる医学塾ではなく、世の中の多様な要求に、柔軟に対応できる語学塾とするという方針転換を決意した。

このように適塾は、時代の混乱ぶりと反比例して、いよいよ栄えた。

そんな中、塾頭の伊藤慎蔵は、適塾の女中のお鹿を嫁にした。最初、お鹿は身分が違くと尻込みした。

だが、慎蔵は意に介さなかった。また洪庵夫妻も諸手を挙げて喜んでくれたので、お鹿は、慎蔵の申し出を受けることにした。

慎蔵はもともと、敬愛する先輩であり親友でもある村田蔵六が構えた寓居「漏月庵」に憧れていた。慎蔵は自分の家を持ち、ついに長年の夢を叶えたのだった。

お鹿はしっかり者で、慎蔵を深く尊敬していた。そんな献身的な若妻に支えられ、慎蔵の生活は一変し、安定した。

それからしばらくして、慎蔵に仕官の話が来た。

なんと、越前大野藩の藩校の教授職である。

越前大野藩は四万石の小藩で、福井から八里、内陸に入ったところであり、四方を山に囲まれている。

英明な藩主・土井能登守利忠は意気盛んで、藩政の新たな展開と

して北蝦夷地、現在の樺太経営に関心を寄せていた。
このためロシア使節と交渉した経験を持つ慎蔵を、召し抱えたい
と考えたのだ。

大型船の建造やロシアとの交渉に、慎蔵という人材がなんとかして
も必要だった。

藩の重役の中山良休が招請にあたった。

彼は、大野藩の特産品の煙草や生糸などを商う大野屋を浪速に開
き、番頭役も務めていた。

慎蔵を店に招いた中山良休は、いきなり切り出した。

「蝦夷地を、オロシアの脅威から守らなければなりません」

思いも寄らない言葉を聞き、慎蔵はびっくりする。

だが天保山沖で、ロシア使節と折衝した慎蔵には、深く響くもの
があった。

良休は滔々と語り続けた。

「わが大野藩は、藩主の土井利忠さまが藩政改革を行なっておりま
す。しかしながら山間の狭い領地、思うに任せません。そこで目を
付けたのが北辺の地です。蝦夷地、択捉、樺太は広大な開拓地にな
ります。そのため堅牢で足の速い巨大船を建造する必要があります。

そこで伊藤殿に出仕していただき、藩校『明倫館』の頭取として蘭
学を教えつつ蝦夷地開発や大型船・大野丸の建造に関してご助言を

「いただきますのです」

中山良休の言葉を聞いて慎蔵は、帆ほに風をはらんで洋々と出航する大型船の舳先へびに立つ、自分の姿を思い浮かべた。

安政二年十一月、伊藤慎蔵は適塾を去り、新妻のお鹿しづなを伴って大野藩へ向かった。

伏見まで三十石船で行き、そこからは琵琶湖びわこの湖西の道を辿った。海のように広い琵琶湖の湖面を、寒風が吹き渡る。

そこから、すでに雪が積もっている山中の森を越えた。たどりついた花山峠とうげの頂上から、広い平野が見渡せた。

慎蔵にとつての新天地、大野藩・譜代四万石が眼下に見えた。

この時、伊藤慎蔵は齡よわい三十一。

慎蔵は、上げ潮しほに乗った。そして翌安政三年（一八五六）、師・洪庵の家族と更に深い関わりを持つことになる。

その頃、参勤交代さんきんこうたいで江戸に出府する藩主に同行し宇和島を退去した村田蔵六が、途中で適塾に立ち寄り、久しぶりに洪庵に挨拶している。

蔵六が江戸にお目見得すると、彼の周りに蘭学を学びたいという者が陸續と集まってきた。

江戸の蘭学の権威、大槻俊斎おおつきしゅんさいの知遇を得て蔵六は蘭学塾「鳩居堂きゅうきどう」

を立ち上げ、押しも押されもせぬ蘭学の第一人者として頭角を現した。
二宮敬作の長子で、適塾で修学していた二宮逸二も馳せ参じた。
蔵六や慎蔵を慕っていた彼は以後、その短い人生の最後まで、蔵六の傍らで過ごした。

大槻俊斎にも、後に蘭書解禁のきっかけとなる「銃創瑣言」の校閲を求められ、蔵六は私見を述べている。そうした諸々が「鳩居堂」の評判を、一層高めることとなった。

伊藤慎蔵しかり、村田蔵六しかり、このように適塾の塾頭は各藩から熱い視線で見られ、医学より蘭学の砲術などの方面で仕官の道を切り拓いていった。

しかし世には尊皇攘夷の空気があふれ、夷狄の学問である蘭学は目の敵にされていた。

洪庵の姉の子の藤井高雅は、養子に出て神官職を継いだ。だが国運を祈り祝詞をあげるより、直接国事に奔走することに夢中になった。高雅は適塾に立ち寄り、海防の必要性を熱く語った。

そんな調子だと、攘夷の連中に目を付けられかねない、と洪庵は危惧した。

盛名を上げた洪庵も、自身の足元は決して盤石でない、と
思っていた。

そんな中、除痘館立ち上げ時からの盟友、日野葛民が病に伏し、

あつという間に身罷みまかってしまった。それは夏の陽射しが強くなり始めた七月のことだった。

右腕として頼りにしていた義弟いぐせうの郁蔵も体調を崩し、除痘館の社中から身を引いた。

洪庵は、未だに官許を得られない除痘館の未来を思い、暗澹あんたんたる気持ちになる。

そんな暗く沈んだ洪庵の気持ちを明るくしてくれたのは、父の死去に伴い中津藩に戻った福沢諭吉が、再び修学を願い出てきたことだ。

諭吉は故郷の借財を清算し、素寒貧すかんびんだった。だが抜け目のない彼は、中津藩の重臣が購入した蘭書の「築城全書」を書写して持参したので、洪庵は翻訳を命じ、その労賃ろうちんで諭吉を塾に置くことにした。

諭吉が戻ってくると、適塾に活気が蘇よみがえった。

血尿けつにょうを流すほど、死に物狂いで学問に励みながらも諭吉は、やんちゃ坊主ぶりを遺憾いかんなく發揮し、小料理屋から失敬した小皿よじがわを淀川に浮かぶ屋形船に向かって投げつけて冷やかすなどという、とんでもないいたずらも先頭に立ってやったりした。

その頃、四十七万石の雄藩ゆうはん・筑前国福岡藩ちくぜんの御典医ごてんいに任じられた洪庵は、蘭癖藩主・黒田長溥ながひろ侯の大坂蔵屋敷に招かれた。そこで洪庵は侯が入手した最新の蘭書を拝見する機会を得た。

無理を承知でお願いしてみたところ、黒田侯は洪庵に、気前よく

大坂滞在中の三日間、貸してくれることになった。

洪庵が適塾に持ち帰ったその本を見た諭吉は、「この本は喉のどから手が出るほど欲しいが、今の我々にそんな金はない。だからせめて、電気について最新の知見が書かれている章だけでも、皆で筆写してしまおうではないか」と大号令を掛けた。

そうして適塾生総動員で三日三晩かけて、電気の項目の筆写を成し遂げてしまったのである。

諭吉には、周囲の人々をその気にさせて、爆発的な行動に導いてしまうような、不思議な力が備わっていた。

彼の才能は適塾で、見事に花開いた。

諭吉はまさしく、ひな鳥が雨露あめつゆを凌しのげる広い庵を作り、そこから大いなる若鷹わかたかに育て上げて飛び立たせたいという、洪庵ほっしんの発心の体現者であったのだ。

こうして適塾は今や、青雲の志いだを抱く若駒わかこまにとって、天下とうりゅうの登龍門もんとなっていた。

だがそれは同時に、攘夷の嵐が吹き荒れる時代には、地獄門にもなりかねない、危険な要素はらを孕はらんでもいたのである。

(つづく)